

開山堂

開山堂は、圓教寺の境内の中で最も重要な建物である奥之院の中にある。お堂は開祖性空上人が入寂された 1007 年に、上人の御骨を祀るために、建てられた。勤行はここで千年以上に渡って毎日行われている。

現在の建物は 1673 年に建立され、江戸時代（1603～1867）の寺院建築の代表的な例である。屋根を支える組み合わされた腕木は、有名な彫刻家左甚五郎（fl. 1624-1644）によって彫刻された三体の神話上の守護神（金剛力士）を含む、さまざまな精巧な彫刻で飾られている。伝説によると、もともとは建物の四隅のそれぞれにひしを支える神話上の守護者が 1 体ずついたが、四体のうちの一体は巨大な重量を支えることができず、逃げ出し、今日見られるのは残った三体だけである。

天台宗の寺院に共通する建築様式に従って、お堂の中心は土間床になっている。主要な祭壇は、どっしりとした漆塗りの扉と複雑な屋根を持つ大きな厨子を支えている。お堂の格天井は、御聖櫃の上の部分が高くなっており、性空上人の高貴な地位を表す象徴的な役目を担っている。

遺骨箱は、等身大の性空上人像の中に収められている。彫像が 2008 年にレントゲン撮影されたとき、研究者たちはこの像の頭部に性空上人自身のものだと考えられているお骨が納められていることを発見した。開山堂は国の重要文化財である。